

Title	惟然・淡斎の研究補遺（三）
Author(s)	鈴木, 重雅
Editor(s)	
Citation	大阪府立大学紀要（人文・社会科学）. 1961, 9, p.17-20
Issue Date	1961-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10466/11939
Rights	

惟然・淡齋の研究補遺（三）

鈴木重雅

惟然が、京都のつゞらや町から、岡崎の風羅坊に移住したのは、元禄十四年の春、梅花薫る頃であったことは、已に、「その花」の翁塚記によって証し得たと思ふのであるが、翌元禄十五年に、姫路、岡山方面に、行脚をしたのは、二葉集に、

湖南の鳥落人はばせをの翁の跡を惜み、せめて彼おもかげを、木曾塚の无名菴に残しをきてむとて、勸化の句集を思立待とぞ。

と、高世が記してゐるので、推察せらるゝ如く、大津の無名菴の衰退を嘆じての事であつたので、この時には、岡崎の風羅坊には、まだ芭蕉像は奉安してなかつた様で、同じ二葉集に、千山が跋して、

むら鳥のにぎはゝしきまで、鳴まどふ夕暮、この末も豪駝が植けむ、さかへたりなどたはぶれて曰、きゝ伝へし枯野と云舟は朽ても琴になり、宸襟をやすめ奉り、し□□は終焉のかれ野の吟は、国のはて迄あはれにもてはやしぬるぞ。頓て霞をたのみ顔なるけぶりを見るにしも、師の像を安置せむことを思つとぞ。予も有がたき事におもほえて、山はふかゝらねど、あらはならず。印南野ゝいなにはあらぬことに思ひよりぬ。

と言つてゐる如くである。然らば、芭蕉像安置の年は、いつかといふに、前号の拙稿、引く所の「みのつか」（正徳二年）に、

先師はせを翁の像あり鳥落人惟然洛の岡崎に安置してかりの庵を風

羅坊と呼しはらくこの所に遊

とあるが、安置年代を明記してゐない。年代不詳の惟然の書に、
尚々了貞様に朝夕よくく

御つかへ御尤存候あとと申上候已上

了貞公御快然ニ御くらしあそはし

御家内其外さそく我等

正月始ニハ大津会とも

はや夏にならん梅しやの椿しやの

なとそれる洛入只今ハ

洛東黒谷ニ草菴求申

安心いたし花なとと申斗候

黒谷ニ而道半やしきと御申

ヒ下候へハ書状ととき申候

六月ニハ翁像開眼の

会来春ハ十七回忌

黒谷ニ二千折なとと連中

申斗候来春ハ必々

直ニ此方菴へ御落着候

やう風呂敷敷ニ而かるくと

待申斗候將又翁手跡

其元へよく可有御座とヒ存

下し申候一集御催し

種もと如此存候其内

御預御状申候先々当分

安心たのしみ申候あとる

可申上候 以上

三月十日

梅花仏葉鶴堂様(本文の判紙には、鳥居大理大学教授の示教に負うところが多い。多謝)

この書翰の年代はといふに、「来春ハ十七回忌」とあり、芭蕉の十七回忌は、宝永七年に当るのだから、本書翰は、宝永六年の執筆に係るものと見なければならぬ。従つて、翁像の安置開眼は、宝永六年の六月といふことになる。元禄十四年、風羅坊を求め得て後は、関との間を往復してゐて、十四年の冬、芭蕉の九回忌は、関で奉行した趣は、「駒撮」に見えてゐる。十五年の夏から秋は、播州方面の行脚、十月湖南に帰來、冬(?)は橋立方面一の行脚(四山集、続山彦)、十六年は、京住、宝永元年は、春、伊勢、尾張行脚、二年は、湖南より帰郷といふ風に席幾まる違が無かつた様である。宝永三、四五年頃の動靜は、探るべき資料が見当らないので不明である。本書翰の葉齋堂なる人については、知るところが無いが関の人らしく、かの

しとやかなこと習ハふか花の鶴(真蹟)

は、この葉齋堂の長寿を賀する為に与えたものであるが、惟然句集には、「出羽にて」と詞書して、下五が「田打鶴」となつてゐる。真蹟に従ふべきであらう。この書翰は、京都にゐて、郷里の葉齋堂に送つたものと思はれる。文面によつて、推定すれば、惟然は、少くとも宝永四年の暮までは故郷にゐて、五年春湖南に來着、大津の俳人らの唱酬に春を送り、夏に入つて上洛、黒谷に落ち着いた様であるが、文面では、この時始めて菴を求めた様に受けとれるので、前掲の説と矛盾

するのであるが、「その花」や百丸の記述と考へ合せると、疑問が湧く。が、「みのつか」の年代が不明なので、今一つ、決定がしにくい。それに比較すると、この手紙の方が、はっきりと年代を示してゐるので信憑するに足ると思ふ。開眼の年は確定して來るわけである。

下郷百松氏藏の

洛東黒谷風羅場

一 芭蕉翁塑像 長寛尺八寸 古仏作

萬人講壺人前壹分宛

各ころざしをねがひ候

洛東風羅場は東西の國く風雅人

上京のおりからは朝夕物かるふ

足やすめのためなり此道

も猶采へゆかむ祈禱卷く

毎月たえず貧交の月花

猶ひさしかれとおもふ

願主 惟然

右の文に、諸国の風雅人上京の折柄に駐杖のところとして、この草菴を提供する旨を述べてあるが、「朝夕ものかるふ」と符節を合する様に、「風呂敷に而かるゝ」と待つといつてある。書翰に見える了貞様といふのは、葉齋堂の母であらう。

風羅坊の位置は、「道半やしき」の所在が分れば、判明するが、岡崎に、左様な古名が、今も残つてゐるであらうか。その道の人の示教を仰ぎたいものである。

猶、序に、惟然の丹波丹後行脚について、附記して置かう。前記の如く、惟然の両丹行は、元禄十六年刊行の「四山集」に、はし立にあそびて

あつちからこちからも猶与謝の海

いせん

とあるのと、宝永二年刊行の「続山彦」に、

丹波にて

しぐるともふみはたがえじ猪の道

惟然

とあるのと、明瞭であるが、猶、「虚空集」に、

橋立行

もとより実あれハそ神田の里なりけん山より山をも草扉の

ひとつそたつとけれハなりけらし

若葉のミ代のせんさくハ嘸やさそ

なんの為にかなやまされつゝはからぬ境につかはれなから

しはらく爰に勞する里そ北広瀬となん

飛たものか一番草をならへとも

駅ハ福を知るの山なれと夜もすから松の下風にそ吹るゝか

のわたくしの氣習いかなれハそ

まんたまた／＼帷子の垢ながら

ふんきつて猶わるうなれちる梅と

年月心にかゝる海面ハ与謝の浦さひしう西行法師もかくそ

詠め給ひしとや

鳥落人艸

酒をのみ餅を喰なはいかならん

只見るたにもあまのはしたて

以上によれば、元禄末年に、橋立方面に出かけたものなることが分る。

「虚空集」は、四山集と同年の元禄十六年の刊行で、惟然の口語調運

動が高潮に達した頃のもので、その風潮は、江州方面にも浸潤し、虚

空集の撰者、坡山東海も、之に響應して、この集を思ひたつたのであ

る。東海の跋に、

邪とやら正とやらもたゝおのれをもとむる物から鷲のゐるにらの

ませ木花の賤やとやられけんハ合歡の木の怨をのそき萱草の憂を忘

る、心地こそむめはまつ筑紫に月ハ松しまの名より忍ふ草の露とも
なりけらしされハ予か拙を養ふの信を伝女房ともにも此見ちを語ら
ましかハもとめすしてしかも專にせされはならざらんか一向にたの
めるも功なきにや術とおもへるもはた徑に走るとなん只私なく欲な
くは尊き事鳥落人もかくは／＼よし／＼小人のはらハたをめぐらし
て君子の慮となすやれそれをなす是をなすといひやらのひ

志迪齋 東海跋

とある。「とてしも」の序文など、同様、難解な文であるが、利欲斷
滅を説き、かつ実践した惟然に心服の様子は窺はれる。惟然の真率な
風格に同情を寄せ、またその句風に同調した湖南の俳人たちの中、乙
州も、之に序して、

虚空／＼目を閉てめつたこくうをさくり見れハその青葉か末の柏原
ならんその中に四時を友とするの二雄あひあらはれてまさに恋／＼
たり坡山虚空に吟すれハ雲をこり東海虚空に嘯ハ風起る風雲己に交
へましへるのゝち虚空に一つの滑稽往來す見れハ花にあらずといふ
ことなく見れハ月にあらずといふことなし鄙諺狂言の自由をなすと
かやされハ無尽の大道造化にしたかひ造化にかへれとは誰かいふこ
れこくう／＼于時元禄癸未とし花月上旬

江南 設楽堂

乙州叙

これに依つて坡山、東海が江州柏原の人なることが判明する。惟然の
口語化運動に共鳴した湖南の俳人から、近江路往反の惟然から、その
指教を受けて、この集を撰するにまで至つたのであるが、乙州の母、
智月は、ことに惟然の人となり愛して、庇護した様であるし、虚空
集に、

賀鳥落人臥病

あたゝかにそふてやなきの力こま

乙州

とあるのを見ると、東奔西走、席燦まるに違なき身上を案じての余、病の為に静養の機を得たのを賀してゐる様である。俳風も惟然に似たところがあり、智月の句風も、その温雅な風格を示してゐる。

朝毎やちよつと来たる颯ウツサイ

(西の雲)

老の寢覚のかきりなきに

雪やけや夜毎に孫か手をふかせ

(勸進牒)

寐もせて我はなせ啼夜の鹿

(入日記)

天水にたまる月影ま一はい

(とてしも)

てまりならちるともあかれ飛あかれ

(組の古畑)

あちさいはまたはなしやもの四十から

(芭蕉門古人真蹟)

天神の御ねんきにまいりて

此神の子ではないかよ松と梅

(みつのも)

これらの口語使用には、些の銜気なく、水到渠成の風があり、惟然に近い。之に共鳴したのも偶然でない。虚空集にも、句を寄せてゐる。

惟然の同情者の外、惟然を罵倒し、惟然の鮑壺の句は、「小便壺の中にかいすつる」といつてゐた許六までも。馳せ参じて、

こくうから虚空を見れハこくう哉

許六

と、愛嬌を見せてゐるのも面白く、また、惟然は、虚空集に、

五老井阿段につふやく

いたハるか花に行から先草鞋

惟然

といふ句を出してゐるので、(再掲)その詞書から見れば、この美少年に心を寄せてゐたかとも思はれて、五老井に出入してゐた様に推定

せられる。乙州の叙文中に見える「鄙諺狂言の自由をなす」といふのは、「二葉集」の

但戲言俗諺、無飾無巧、突然頓出、不煩思慮。此之謂談諧也。

といふのと、同じことである。許六の外に、派外の鬼貫も、俳風が似てゐて、惟然の心友であったので、句を寄せてゐる。

風が吹梅のつほミハしつかりと

鬼貫

臘三

此雪かふるか〜と師走迄

この外、この頃の惟然調に倣つたものに、
若竹のぬれ〜ぬれの坊主かな
すもふ見にゆくか行ぬかさあなんと
初雁か伏見か淀か夜もいまた
本かいのして〜とこてほと、きす
さあ雪々さあ〜木の葉仕廻口
やれはらへ又喰ひつく花に蝶
糞船にうたてや紅葉なふ散ハ
膳とらは袴ぬけ〜涼もうに

伊保川の水のうつま、も

うれしくて湖南人を留む

八月水はたしを打ておゐたハさ

涼風入簾

是かまあ昼寝かせいておかれうか

水仙につれなう雪よやれ雪よ

あのはなに廻らハマハれ是からそ

いかうよい月ハとこよりかしこより

鉢た、きまして拙者かおろかてハ

いづれも惟然の感化顕著で、地方的に言ふと、北は出羽、中部地方では美濃、中国地方では、播州を中心とした国国、九州地方では豊後、筑前、近畿地方では京都、大阪を含んでゐる。(元)

ハリマタツノ

雲台

キヒツ

高吉

宜仲

月尋

坡山

乙州

雪柯

吉高世

伊伯然

東海

可眺

重龍